

健康文化

語り部

前越 久

今年も8月15日に第53回目の終戦記念日を迎えた。当時10歳の子供達も還暦をとくに過ぎていることになる。日本人の平均寿命は、最近厚生省が発表した「簡易生命表」によると依然世界一で、女性が83.82歳、男性が77.19歳であると新聞で報道されていた。とすると、当時10歳で戦争を体験した子供達も、あと約20年もすると大方の人達は地球上から姿を消すことになる。私自身、丁度この年代に相当し母子家庭の小学生であったため飛騨の山奥に疎開していた。電波状態が悪かったということだけが原因ではないが、聞いた玉音放送は殆どその内容を理解することができなかった。それほど幼かった。戦中、戦後の食糧難の記憶が鮮明に残っているくらいのものである。従って、当時10歳の少年では第2次世界大戦中の“語り部”としての資格はないのかも知れない。それでは当時20歳であった人達ならどうであろうか。彼等が今後“語り部”としての役目が果たせる期間は、あと10年あるかないかということになってしまう。各家庭においても“語り部”がだんだん少なくなっていく。

同じようなこととして、私は本学の放射線技術科学専攻のルーツを辿ることのできるただ一人の“語り部”になってしまった。昭和30（1955）年：名古屋大学医学部附属診療エックス線技師学校（修業年限2年、定員20名）新設の産声を聞いてから、昭和41（1966）年：専攻科設置（修業年限+1年、定員10名）、昭和44（1969）年：放射線技師学校（修業年限3年、定員20名）に改称し、昭和55（1980）年：医療技術短期大学部（修業年限3年、定員40名）への昇格を経て、平成9（1997）年：名古屋大学医学部保健学科（修業年限4年、定員40名（3年次編入学定員5名））設置に至る43年間の教育制度の変革のすべてに関係した。私は、今年度末停年退官を控えて、何等かの形で“語り部”としての役目を果たしておかなければならないのではないかなどと妙な責任を感じているところであるが、具体的な方策が見つからないまま、時間ばかりがかなりのスピードで過ぎていくように感じる今日この頃である。

私は昭和41年の春から教壇に立った。30歳の時であった。当時の学生は、

今ではもう50歳を超え、その子供が大学を卒業するくらいの年齢になっている。それ以来、講義を終えてから何時も自分の講義内容や講義のやり方などについて繰り返し反省してきた。まず会心の講義ができたかどうかの自己評価には、講義中に居眠りをする学生がいたか、いないかをバロメータとすることにした。簡単なようでこれがなかなか難しい。特に昼食後に当る3限目の講義中に居眠り学生を出さないようにするためには相当の努力が必要となる。

私“語り部”が受講した名講義は幾つか上げることができるが、名古屋大学理学部の上田良二教授をまず上げなければならない。エックス線物理学の講義を担当された。先生は昭和30年に「フリーデル法則の背反則の発見」により朝日文化章を受賞されているが今は亡い。週1回の講義で、2～3回の講義を終え一区切りがつくと、次の時間は始めから終わりまですべて質問だけの時間として消化された。当時はエックス線のエの字も分からない学生たちが矢継ぎ早に質問したものだった。どんな馬鹿な質問にも丁寧に答えられた。学生からの質問が途絶えると、先生の方から学生に対し質問が始まるという寸法である。居眠りしている暇はなかった。正解で答えると大変喜ばれてお褒めの言葉があった。いい年をしても褒められると悪い気はしないものである。時には、参考書を徹底的に調べ、勉強して先生を困らせてやろうと企んだこともあったが、参考書以上に解り易い説明に感服したものであった。私も長年何とかして上田教授のような講義ができないものかと苦心したが、どうしても一方的な講義になってしまい、会心の講義ができたという満足感を未だ得るに至っていない。

昭和30年の名古屋大学医学部の鶴舞キャンパスは木造モルタル塗りの病室が各所に点在していた。我々は当初は、鶴舞キャンパス北西の一隅（現在の生協書籍部と看護婦寄宿舍あたり）に精神科の講義室があり、そこを拠点にして講義を受けた。その他はジプシーのように空き教室を縫って移動した。東南の一隅（現在の鶴友会館のあたり）にあった木造の第1及び第2講義室や、その中間に天井裏のような小部屋がありそこでも講義を受けた。階下は整形外科の手術室であったため、消毒の匂いや、熱湯消毒の水蒸気が立ち込めており、夏季などは講義をする方も受ける方も大変であった。43年間のほんの一端を述べたが、“語り部”は多かれ少なかれ昔の苦労話をしたがるものである。

（平成10年9月3日記）

（名古屋大学医学部教授・保健学科放射線技術科学専攻）